



ほり ち ゆき
堀畑 裕之 さん
デザイナー

既成のデザイン概念に挑戦

「日本の美意識」を コンセプトに 新しい服を創造する

日本人にしかできないデザインを求めて自身のブランドを設立。桃山時代の歴史からインスピрайヤーされた「慶長の美」シリーズに続き、「やつし」「映り」「見立て」など日本独自の美意識を形にしたコレクション「日本の眼」シリーズを展開、東京コレクションで活躍しています。

職人としての生き方に憧れて
ファッションの世界に

—— 学問の世界からファッション界へ方向転換された経緯をお聞かせください。

堀畑 哲学を究めたいと大学院に進み、修士を出た後にはドイツで博士号を取ろうと準備もしていました。でも学者にならなかったというよりも本当にならなかったのは哲学者でした。ある時、その「哲学者」というのは職業の名前ではないと気がついた。もともとフィロソフィアとは知を愛すること。学者になつてカントの論文を書くことだけが哲学をすることではないし、考え続けることは学者でなくてもできるはずだと。それに哲学という学問は面白いけれど、ほとんど自分の足元を掘り下げていくような極めて専門的な分野で、共有できる人も少ない。研究者になつて自分の人生を十分に生きることができるとか？もつと人とながつなぐって何かを分かち合いたい、物事を根本的に捉えられる、そういう仕事はないのかと考へ始めた。その頃たまたま出会ったのが、京都で開催されていた「財」京都服飾文化研究財団主催の「モードのジャポニズム展」でした。日本の文化が西洋のファッションに何百年にもわたつて持続的に影響を与え続けてきたことを検証するような展覧会で、当時の僕はファッション

誰もやっていない
服作りだからこそ
やってみる価値がある

—— ファッションブランドではデザイナーとして仕事されていたのですか。

堀畑 5年ほどバタンナーとして働きました。一般的にデザイナーから渡されたデザイン画通りに型紙を作るのがバタンナーの仕事ですが、その会社はアヴァンギャルドというか、服の概念を根本から覆すようなブランドだったので、デザイナーはデザイン画ではなく言葉でイメージを説明するのです。だからバタンナーが具体的にデザインを具現化しなくてはならない。何もないところから言葉だけで服をつくるという非常にクリエイテ

げていきました。

—— 今後はどのように展開していられる予定ですか。

堀畑 「Anahnu」を立ち上げて10年になりますが、ここ5年ほど「日本の眼」というタイトルで毎シーズンのコレクションを展開しています。「日本の眼」とは日本の美意識のこと。民藝運動の柳宗悦が晩年に著した論文に「日本の眼に確信を持ち、それを世界に輝かせるべきだ」とあるのに感銘を受けて始めたコレクションです。日本人が歴史の中で培ってきた美意識、それも「粹」や「侘び寂び」といった典型的なものではなく、例えば「ふきよせ」「映り」「見立て」など、深いけれども日本人が普段あまり意識していない、立ち止まって考えてみたくなるようなものを一つ一つ取り上げて、そのコンセプトを具体的な服の形にしていこうというのをやっています。この「日本の眼」シリーズが完結したら全国を回るような展覧会を行い、これまでシリーズごとに書いてきたコンセプトをまとめた本を出版したいと考えています。

自分を生かせる仕事を
見つけてほしい

堀畑 大学生にメッセージをお願いします。皆が就職活動をしている中で大学

ンには全く興味がなかったのですが、こういう世界があるのかと衝撃を受けました。さらに、哲学者の鷲田清一氏が書かれたファッションを哲学的に語る著作を読んでいくうちに、職人として手で物を作りながら、ものを書いたり考えたりするような生き方をしたいと思うようになっていきました。ただ学問も途中であげ出すのは嫌だったので、修士号を取つてから東京に出て服飾の学校に入り直し、パリコレなどに出展しているファッションブランドに入社したのです。

院に行くこと決めた時、それまで同じ列車に乗って同じ線路を進んでいたのに、初めてガチャンと自分の線路に切り替えたという感じがして、孤独と不安を覚ええました。ブランドを立ち上げた時も、自分が考えたコンセプトの服が人々に受け入れられるのか、ビジネスとして成り立つのか不安でしたし、これまでその連続で来たとも言えます。こうなるだろうと予測のつく、あるいは皆と同じ方向に進むのであれば楽でしょうが、人がやっていないことをやる、まして未来が見通せない状態で進むのは、「自由」ですが同時に不安だし勇気が要ります。しかし自分の人生を豊かに生きようとするなら、自分がこれだと思ふことを求めていくべきだと僕は思います。せつかくの人生ですから、自分は一番生かせる仕事を選んでほしい。新島襄も自分の生き方を選んだ人。普通に侍として生きていけばよいものを、アメリカの政治経済や教育・文化を学びたいと、英語もしゃべれない、生きていけるのかさえ分からない外国に飛び込んでいった。彼が「自由」に生き方を切り拓いていったその結果として、同志社がある。彼が選んだ「自由」から生まれた大学で学べたこと、その生き方に感動したことは、仕事をしていく上で大きな影響があったし、今も強い力をもらっています。(2015年12月9日)

イブな仕事をやらせてもらつて、ずいぶん鍛えられました。ここで一生職人として働いていきたいという思いもありましたが、一方で世の中で人のやつていないコンセプトが見つけられたら、独立する意味はあるという気持ちも芽生えてきました。

—— そのコンセプトとは何ですか。

堀畑 もともと洋服は西洋が発祥で原型が向こうにある。そのためファッションの世界はどうしても西洋中心で、同じ土俵で日本人が勝負すれば後塵を押し続けるしかない。だから日本のブランドが新しいことをしようとすると、洋服のルールをあえて破つたり、形をわざと壊したり、あるいは過度に「和」を強調したりといったものにならざるを得ないんですね。僕は関口真希子というバートナーと一緒にやっています。コテコテの「和」でも西洋の物まねでもない、日本人にしかできないデザインとは何だろうと彼女と話し合つて「日本の美意識が通底する新しい服の創造」というコンセプトにたどりついたのです。それは「Anahnu」の変わらぬテーマですが、そうしたことを正面から見据えてやっているブランドはあまりない、だから自分たちがやるべきだと思つて独立を決意し、ロンドンのデザイナーの元でさらに1年ほど働きながら、2人でブランドコンセプトを練り上



いまむらゆか
今村友香さん
杜氏

ピンチはストーリーの親 常に若い波を起こす 酒蔵をめざして

九州の清酒蔵では唯一の女性杜氏。あるとき突然、酒造りの道へと人生航路の舵を切り、ひたすら泳ぎ続けて約15年。困難と言われた苺リキュールの商品化で注目を浴びた後は、しみじみ飲める日本酒造りに日々奮闘中です。

酒造りの風景に魅せられて

酒造りの道に入られた経緯をお聞かせください。

今村 学生時代は酒造りをする家業を継ぐ気はまったくありませんでした。日本の伝統文化が大好きなので、着付け部で活動したり、南座でアルバイトを続けたり。就職も南座を運営する松竹株式会社に決まり、翌月から正社員として働くという時に、父が過労で体調を崩したんです。「1年でもいいから事務の手伝いに帰ってくれないか」と頼まれた、仕方なく帰省。当時は自分が犠牲になつたという感覚はありませんでした。ところが仕込みシーズンを迎える11月、安全祈願の神事に立ち合ったことで気持ちが一変したんです。笛の音、神主さんのお祓い。厳かな空気。酒造りの風景って、なんてカッコいいんだろうと。そもそも酒造りも日本文化。身近にこんな世界があったことに気づいた。今度は私から父に「残りたい」とお願いしました。酒造りは長らく女人禁制の世界でしたし、甘い世界ではないと言われましたが、気持ちは変わりました。

勉強はどのようにされたのですか。

今村 日中は事務をして、夜は蔵の中で酒造りに関する文献を読む。通信教育で醸造を学ぶ。広島市にある酒類の研究所

では寮生活をしながら、化学理論や醸造物理などを学びました。例えば仕込み用のお米を蔵へ運ぶ時間ひとつをとっても、綿密な計算が必要なんです。お米の重量、移動距離、外気温、仕込み時に求められるお米の温度。すべてを計算した上で、何分以内にお米を運ぶようにと、杜氏は蔵さんに指示を出します。蔵人も指示の背景を理解して動かないといけない。酒造りは春夏はデリケートな仕事です。そうして春夏は研究所で学び、秋になれば呼ばれてもいないのに実家に帰って酒造りを手伝う蔵月。そんなある日、珍しく父から電話がありました。苺農家から「あまおう」で何かできないかと相談されたとき、その話に飛びつきました。

日本酒への扉をつくる

苺のお酒「あまおう」の誕生です。

今村 広島の研究所に相談すると、先生方は大反対でした。苺は酸化が速くてすぐ褐変するため、着色料無しに赤い苺のイメージ通りのお酒を造るのは難しいのはと。それより九州特産のミカンで造ってみたいと助言されました。でも私はあまおうのお酒でないという意味がないと粘り、先生方に教えるを請いました。開発に1年かからなかったのは、研究所という環境があつたお蔭です。

酒造りと蔵づくりを大切に

今後の事業計画を教えてください。

今村 当社が分家した時、「古い歴史にとらわれず、若い波を起こそう」という決意を込めて「若波酒造」という名に決めたこと聞きます。5年前に弟が戻り、事業展開もスピードアップしました。日本酒人気が復活の兆しが見える昨今、よくお客様から言われるのは、「造り手の顔が見たい」ということ。ブログやフェイスブックを始めたり、全国の若い造り手が集合するイベントを各地で開催したり、蔵の見学を実施したり。情報発信には注力しています。あまおうで全国に名を知っていただき、女性杜氏ということでも注目していただきました。でもお客様のお心を人から物へと変えなければ、「若い波」を紡いだことにはなりません。この世界の時計は十年単位。後継者の育成にも着手しています。

どのような酒造りを目指されますか。

今村 若波シリーズのコンセプトは「味の押し波、余韻の引き波」。いつの間にか杯が進む、しみじみと飲める食中酒です。華やかで目立つ香りを出す新しい酵母を使って賞をねらうより、おとなしいけれど波に漂っているような風味のお酒を皆さんに楽しんでもらいたいです。具体的には「バナナのような香り」と表現され

他にもいろいろ、おしゃれなお酒を開発しておられますね。
今村 カシスリキュールと日本酒を使った梅酒や、赤色酵母を使った桃色のにこり酒なども開発しました。すると若い女性に関心を持ってくださり、それをきっかけにして日本酒も口にしてくださるという可能性が見えてきた。日本酒は、店頭に並べておけば売れるという時代は過ぎました。そこへフルーツを選ぶような感覚で入口をくぐり、日本酒の深み、魅力に気づいていただける方法が見つかった。自信を持ちました。

「清酒蔵が奇をてらった」という声はありませんでしたか。

今村 あまおうを発売した時点で同業の方々から言われました。でも日本酒の低迷は、私たち蔵元にも責任があります。私はこれが日本酒への入口になるんだと確信していたので、迷いはありませんでした。先輩の杜氏さんから「あなたは「知らないこと」を強みにしなさい」と言われたことが、今も心に残っています。私はこの世界に入ったばかりで何も知らないし、女性という珍しさもある。それを武器に何でも教えてもらえばいいとお蔭様であまおうは、1年目は1000本、2年目は1万本、3年目は10万本を完売しました。この実績が周囲の懸念を吹き飛ばしてくれました。

る香りを追究していきます。おとなしい香りは、少しでも味が荒いと香りで隠すことができず、その荒さがそのまま味の雑味となつて表に出てしまう。その困難に挑戦していきたいです。そのためには、蔵人全員で同じ舌の物差しを持つことが大切です。杜氏はそれを把握してこそ正確な酒質設計ができる。そして皆がここで酒造りをして良かったと思ってくれるような「蔵づくり」をしていきたいです。

若い人たちにメッセージをください。
今村 あまおうは周囲の反対や色の難しさというピンチを乗り越えて、商品化に成功しました。成功の先には「国内初」という強い肩書きや、日本酒の世界への新たな扉が生まれました。ピンチはチャンスと言っただけで、ピンチは何よりのストーリーになることに気づきました。私にはあの時、ピンチの到来が嬉しかったんです。ね。やつと自分の居場所ができること。だからミカン酒ではなく、あまおうのお酒にこだわった。ピンチに見舞われたら落ち込むのは一晩だけにして、翌日からはぶれない目標を持って歩いていけばいい。だからこそ「家業を継いでほしい」と両親から未だに言われていない私が、今ここで酒造りに打ち込んでいるのだと思えます。

(2015年11月24日)